

史跡高松城跡地久櫓台石垣修理工事現地見学会 資料

まもなく

地久櫓台石垣修理完了



積直し完了寸前の地久櫓台（平成27年1月14日撮影）



積直し途中の地久櫓台
（平成26年1月15日撮影）

平成27年1月17日（土）

主催：高松市文化財課 高松市埋蔵文化財センター

協力：四国産業株式会社

1 位置

地久櫓は、天守の所在する「本丸」の南西部に位置する隅櫓です。本丸には天守と地久櫓の他には大きな櫓は無く、城跡の中心である本丸の中でも重要な建物でした。

2 史料に残る地久櫓台の記録

寛永4（1627）年の「讃岐探索書」や寛永15～16（1638～1639）年製作と推定される「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」には地久櫓台が描かれており、資料で確認できるもっとも古い記録になります。生駒親正いこまちかまさによる高松城の築城開始が天正16（1588）年、生駒騒動による生駒氏の転封が寛永17（1640）年、松平頼重まつだいらよりしげの入封が寛永19（1642）年であることから、生駒家の時期には築かれていたことがわかります。ただし、このころの地久櫓台がどのような姿であったのかについてはわかりません。

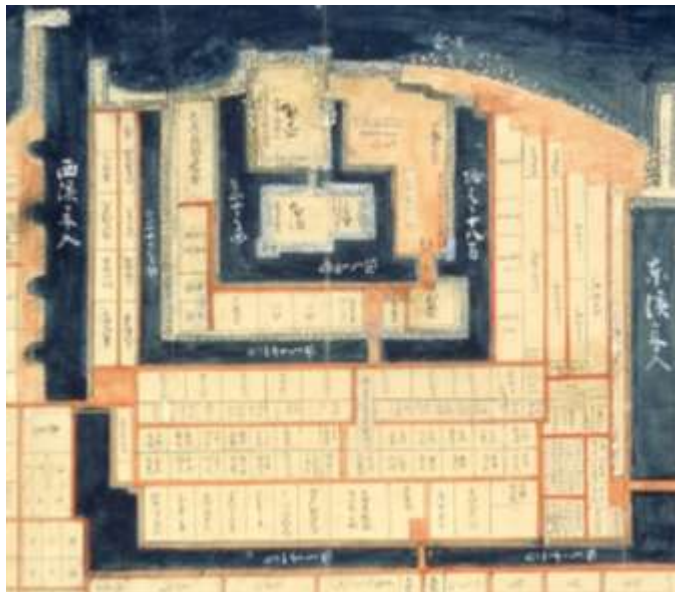
「高松城下図屏風」には地久櫓台は黒壁の2層の建物で、屋根は瓦葺きに描かれています。

明治時代に入ると、天守をはじめとした城内の建物が老朽化を理由に次々解体されていきます。地久櫓台の地下室がこの時期に埋められていることか

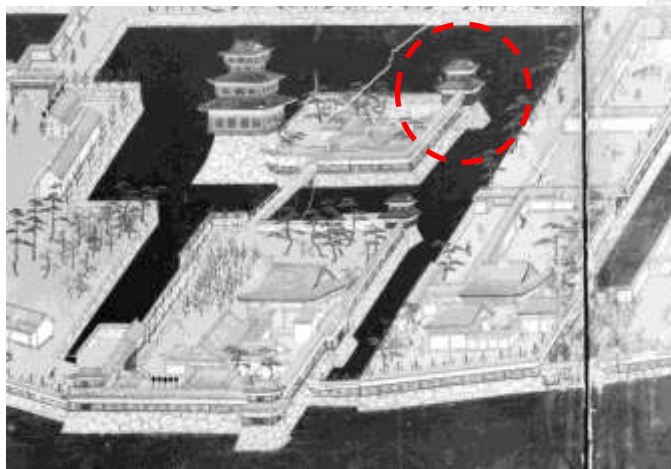
ら、地久櫓もこの時に解体されたものと考えられます。

昭和3年撮影の全国産業博覧会の会場写真には、地久櫓台の上に平屋の建物が確認できます。この建物に伴う可能性のある礎石が櫓台の上に残っていました。その後、平屋の建物も解体されました。出土した遺物から昭和26年以降のことであったと考えられます。

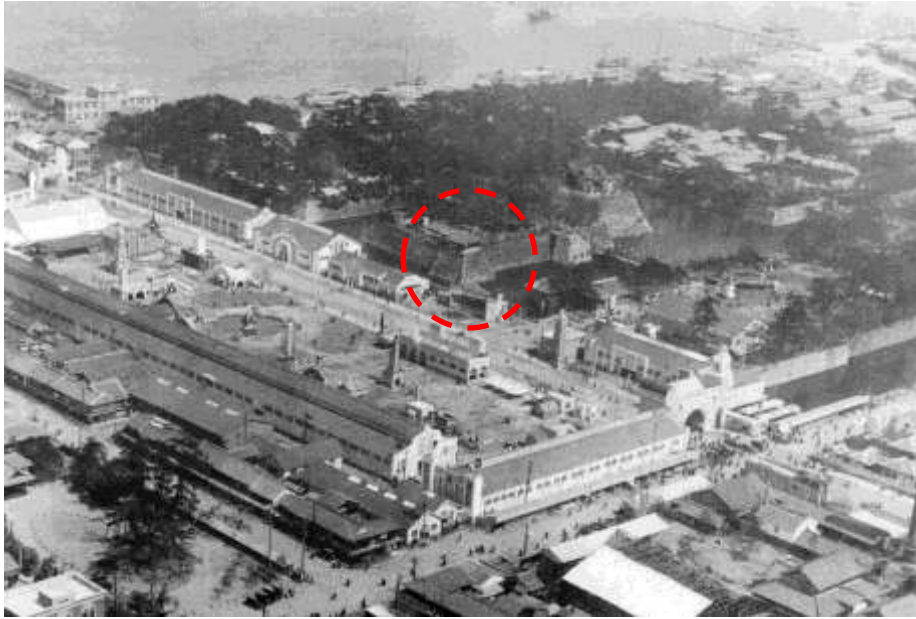
昭和23年には地久櫓台の西側に鉄道の軌道が敷設され、概ね現在の景観が形成されました。



生駒家時代讃岐高松城屋敷割図（高松市歴史資料館蔵）



高松市2004概報を改変（元資料『高松城下図屏風』は県立ミュージアム蔵）

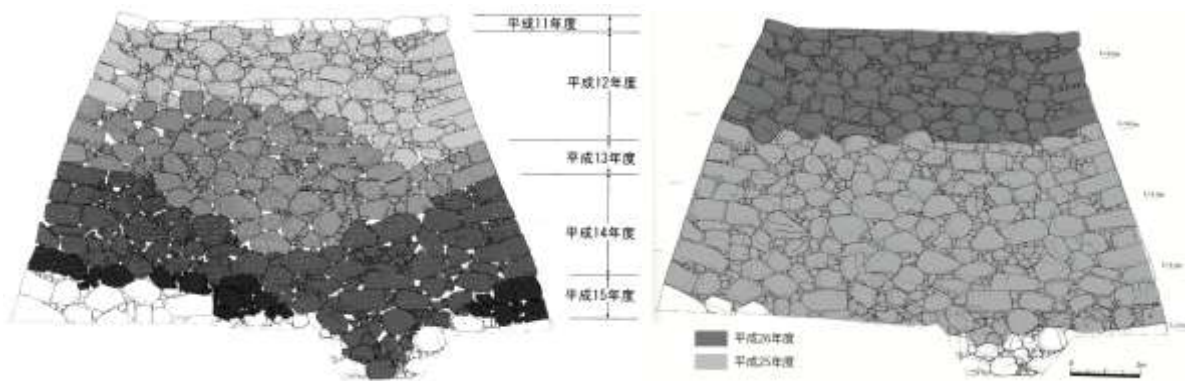


昭和3（1928）年
撮影古写真
産業博覧会会場
となった高松城

3 石垣修理の経緯と経過

史跡高松城跡では平成元年から石垣の危険度の調査を行っており、平成8年に策定した史跡高松城跡保存整備基本計画の中で石垣の危険度を等級分けし、順次修理を行っています。地久櫓台は破損の程度が大きく、また鉄道軌道に隣接していることから、優先的に解体修理を行うこととし、平成11～15年度にかけて石垣解体を行いました。

解体当時は鉄道軌道の立体交差事業が計画され、軌道の位置が現状から変更される予定であったことから、積直し修理は軌道の移動後に行う計画でしたが、平成23年度に事業の中止が正式に決定されたため、平成24年度に積直し工事を開始しています。平成25・26年度でほぼ半分ずつ積直し、26年度末には完成する予定です。



地久櫓台石垣修理の経過（左図：解体工事 右図：積直し工事）

4 解体調査成果の再評価

石垣修理工事の中で得られた新たな知見を基に、解体前の調査の再評価を行います。

(1) 地久櫓台の変遷について

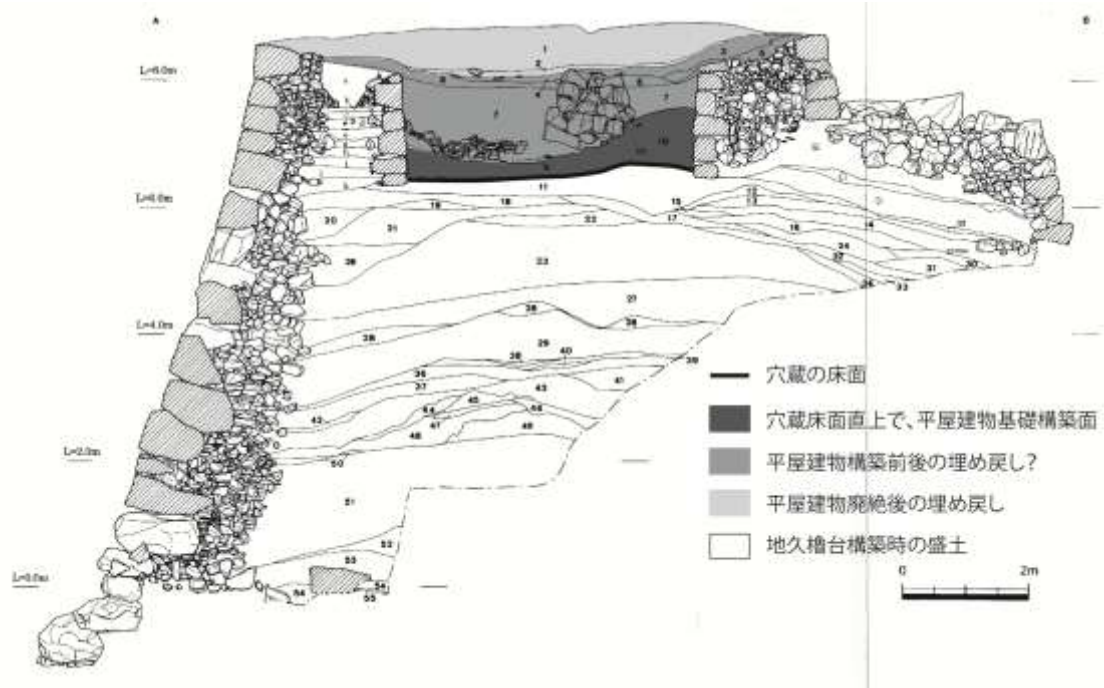
史料からは生駒期に既に地久櫓が存在していること、明治以降櫓が取り壊され、昭和3年までには平屋の建物が建てられたことが分かりますが、発掘調査成果から地久櫓台の変遷をより詳細に再検討してみたいと思います。

解体にあたって、南北方向の断面図が作成されました。一方向の断面のみで、少ない手がかりですが、この図面を見る限り、盛土まで含めた大規模な改変が及んだ痕跡は読み取れません。ただし、穴蔵北側壁の背面には盛土が一切認められず、すべて栗石が詰められているのに対し、南側壁の背面には盛土が互層になって認められます。このため、穴蔵内壁については工程の差が認められ、工程差が時期差、すなわち改変の痕跡を示す可能性も考えられます。ただしこれを補強する根拠がないため、確定はできません。いずれにせよ、現在のところ穴蔵以下の地久櫓台は、構築後改変・積直しを受けていないと考えられます。地久櫓台の盛土から出土した土器類を検討すると、備前焼の播鉢や肥前系陶器皿などから、櫓台の構築は降っても様相1（松本 2003）（17世紀初頭）までと考えられます。この年代は、史料で認められる生駒親正による高松城築城開始年代よりやや新しくなることから、高松城の築城開始後しばらく時間が経過してから地久櫓台が完成したと考えられます。

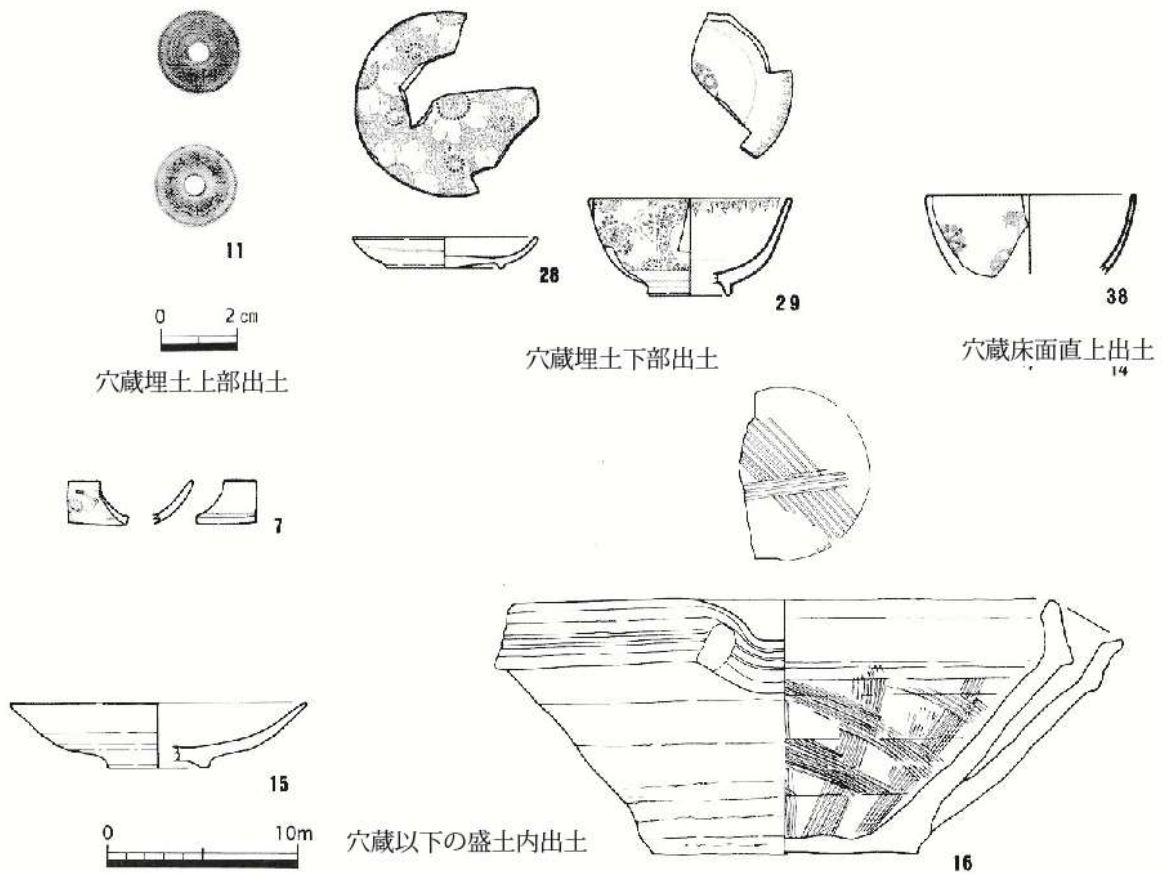
穴蔵ですが、穴蔵の床面直上に溜まった土からは、明治時代以降の土器が出土しました。穴蔵の背面から出土した遺物が確認できないため、穴蔵がいつ造られたのかについては遺物からは不明としなければなりません。穴蔵内部は出土した銅版刷の磁器から明治時代以降に埋め戻されたことが分かります。その後写真に残る昭和3年までに平屋建物の建築が建てられました。この建物建築に伴い、穴蔵内部が少し埋められたのちに、石組の建物基礎が構築されています。穴蔵埋め立てから基礎構築の間の時間差は遺物からは特定できませんでした。その後出土した5円玉の年号から昭和26年以降には廃絶されたものと考えられます。なお、穴蔵の構築年代ですが、後述するように礎石の設計基準寸法が天守台地下1階の礎石の設計基準と同一の可能性が考えられるため、後世の改修によるものではなく、地久櫓台構築当時のものである蓋然性が高いものと考えています。

〈参考文献〉

松本和彦 2003 「西の丸町地区出土の陶磁器について」『高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県埋蔵文化財センター



地久櫓台南北方向断面図



穴蔵埋土上部出土

穴蔵埋土下部出土

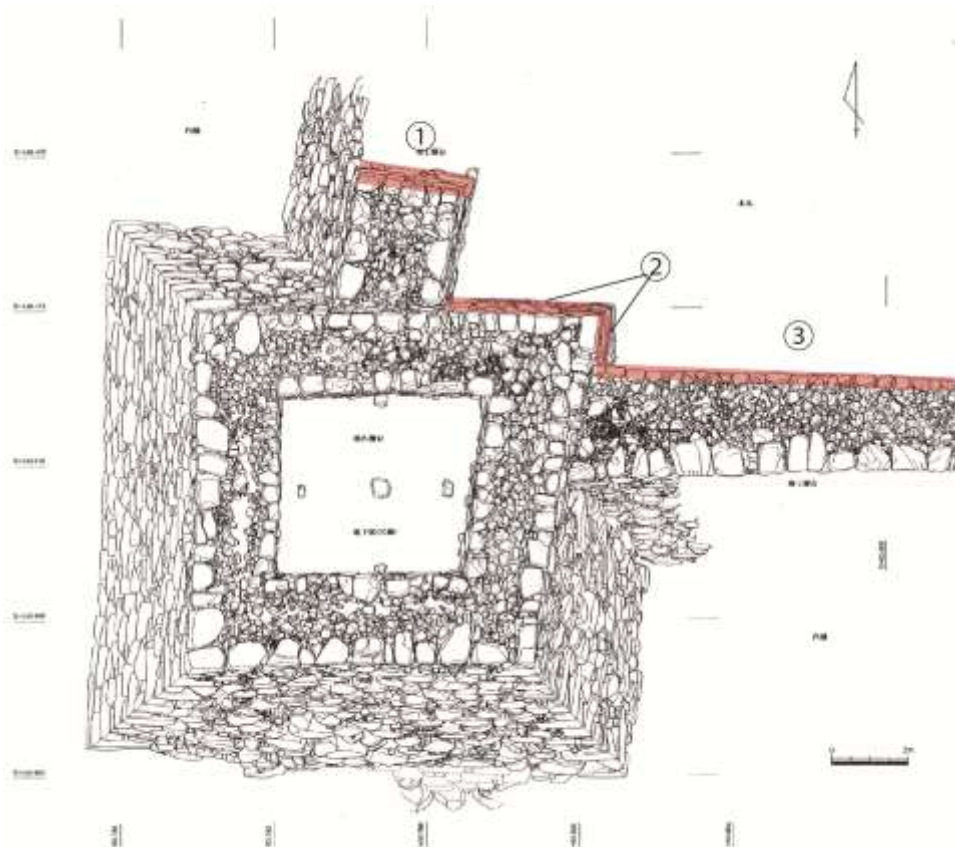
穴蔵床面直上出土

穴蔵以下の盛土内出土

地久櫓台解体時に出土した遺物の一部

(2) 石垣改修の痕跡について

修理工事を行う際、解体前の石垣の状況を改めて確認し、石垣の積み方等を観察した結果、複数個所に石垣の改修の痕跡が認められました。



地久櫓台 改修の痕跡が認められる石垣

①は、地久櫓台北面に接続する多間櫓台ですが、本来この多間櫓台は本丸の西辺に沿って、より北側まで伸びていたものと考えられます。北東隅の隅角部で、根石とその一段上の石材がずれており、上段の石材が根石よりも控えて積まれていることから、あたかも根石が飛び出しているかのように見えます。こうした痕跡から、①では本来あった多間櫓台を途中で切断し、積み直したことが推測できます。なお、この改変の時期や契機については現在のところ不明ですが、本丸内は天守台地下1階を埋め、玉藻廟を建築する（明治35(1902)年）際にその埋戻し材料の供給元として大規模な改変を受けたことが分かっており、それに関係した改修かもしれません。



① 北東隅の隅角部

②は、地久櫓台北東の隅角部付近ですが、特に東面については他の面に比べて用いられる石材の控え長さが著しく短く、隅角部の算木積みに規則性や規格性が低く、粗雑な印象を受けます。また、用いられる石材の中に、他の隅角部の石材で認められる矢穴よりも一回り小さな矢穴が確認できること、後述する③の改変による石垣との接線において、入隅を構成する石材がそれぞれの面の中に食い違いに入りこんでいる様相を呈し、ほぼ同時期に施工された可能性が高いことなどから、②の特に角から東面にかけては、改修を受けている可能性が高いものと判断できます。



②北西隅の隅角部

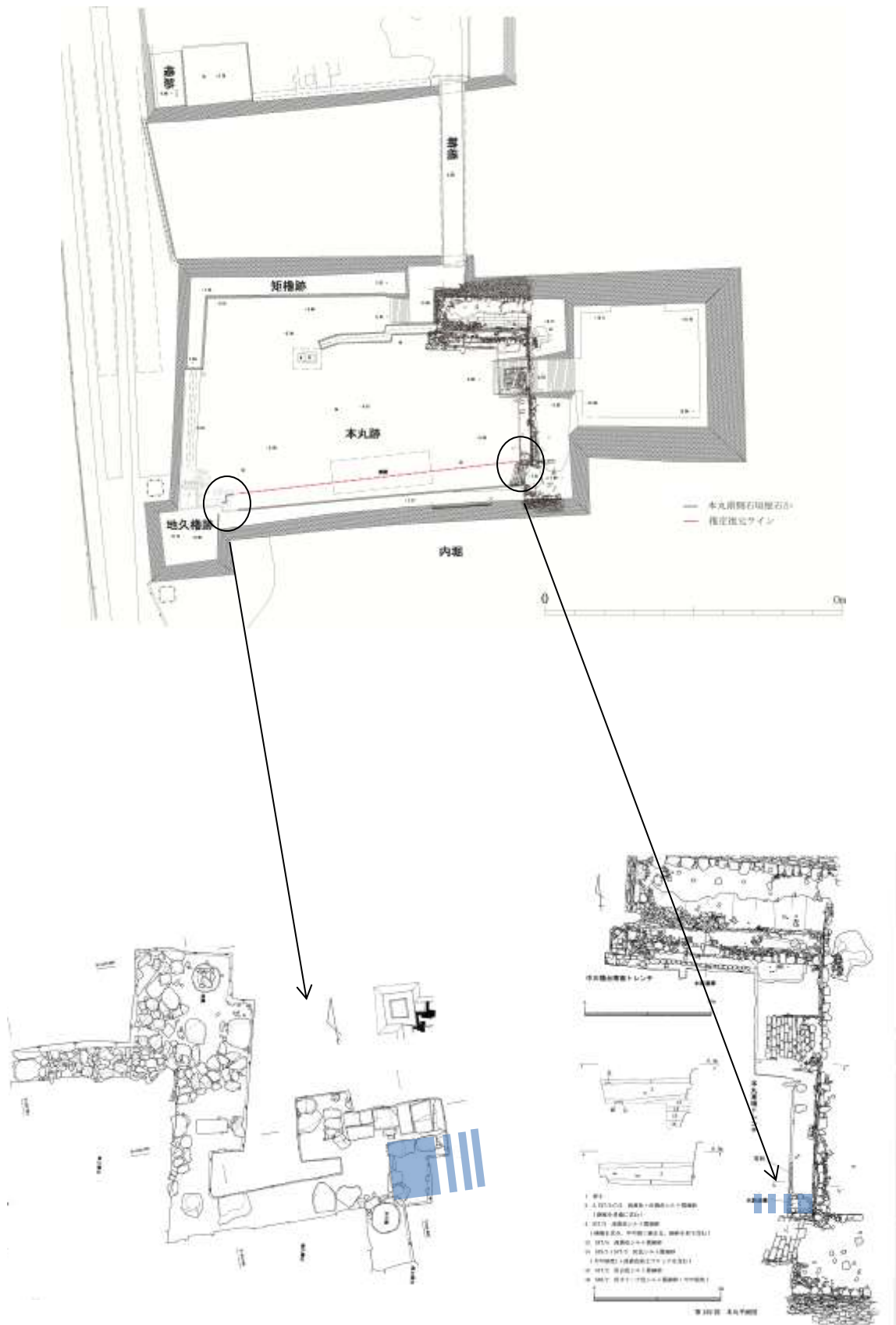


②の一回り小さな矢穴

③は、地久櫓台東面に連結する多聞櫓台の北面です。石垣に用いられる石材をみると、小振りな安山岩が多用される点が目立ちます。また、石垣の積み方も谷積みになっていること、石材のいくつかに小さな矢穴跡（豆矢）が認められることから、後世の改修を受けたことが推測できます。この石垣の北面の根石付近の発掘調査では、より古い段階の石垣の一部とみられる石列が認められることから、本来の石垣よりも南側へ幅を減じて積直しがされたものと考えられます。古い石垣の一部である石列に対応すると考えられる石垣が、天守台の発掘調査の際に発見されています。この2箇所調査成果から類推すると、今回工事の対象とした範囲のみならず、本丸南側石垣の北面は大規模な改修を受けたものと考えられます。豆矢の存在と改修の大規模であることから、改修の契機は上記の玉藻廟建設である可能性が高いと考えられます。



③の谷積みされた石垣



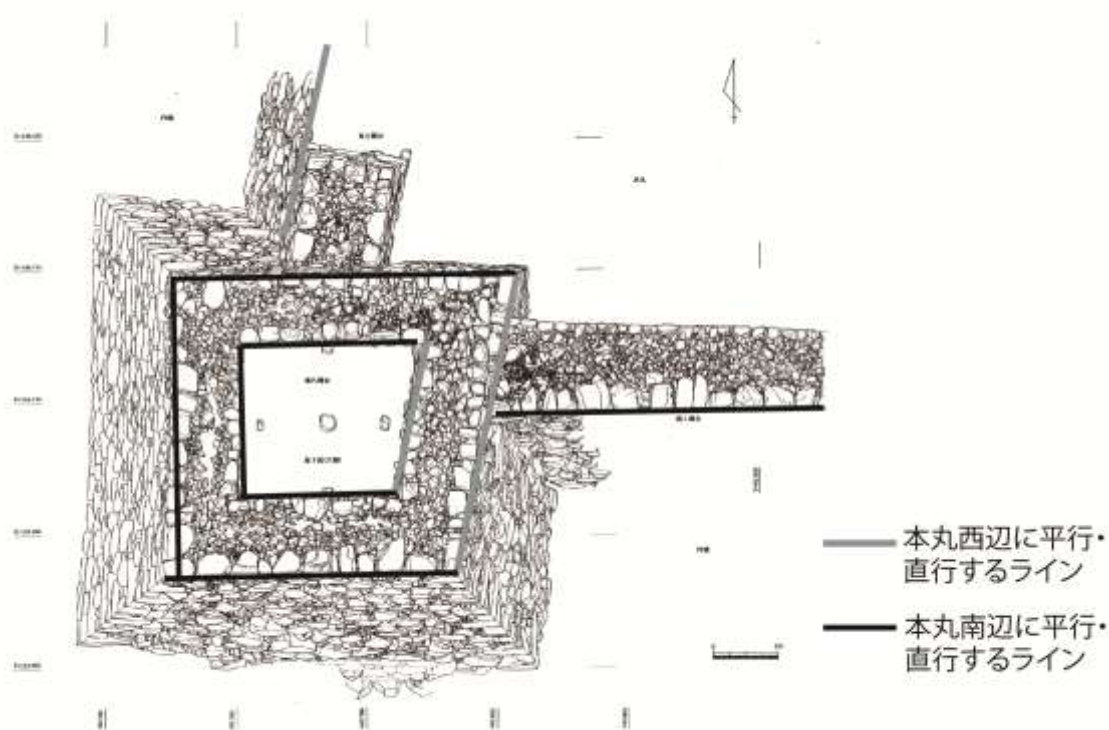
本丸南辺の改修の痕跡と本来の石垣ライン（推定）

(3) 地久櫓台の平面形について

地久櫓台の平面図をよく見ると、平面形がきれいな正方形ではなく、北東側に特に広がった、歪んだ台形を呈していることが分かります。なぜこうした平面形を採るのか、検討しました。

まず、石垣築造後に変形して歪んだ形状である可能性が考えられます。(2)で検討しましたが、北東隅の石垣は改修されたと考えられ、この改修に伴う形状の変化である可能性が考えられます。

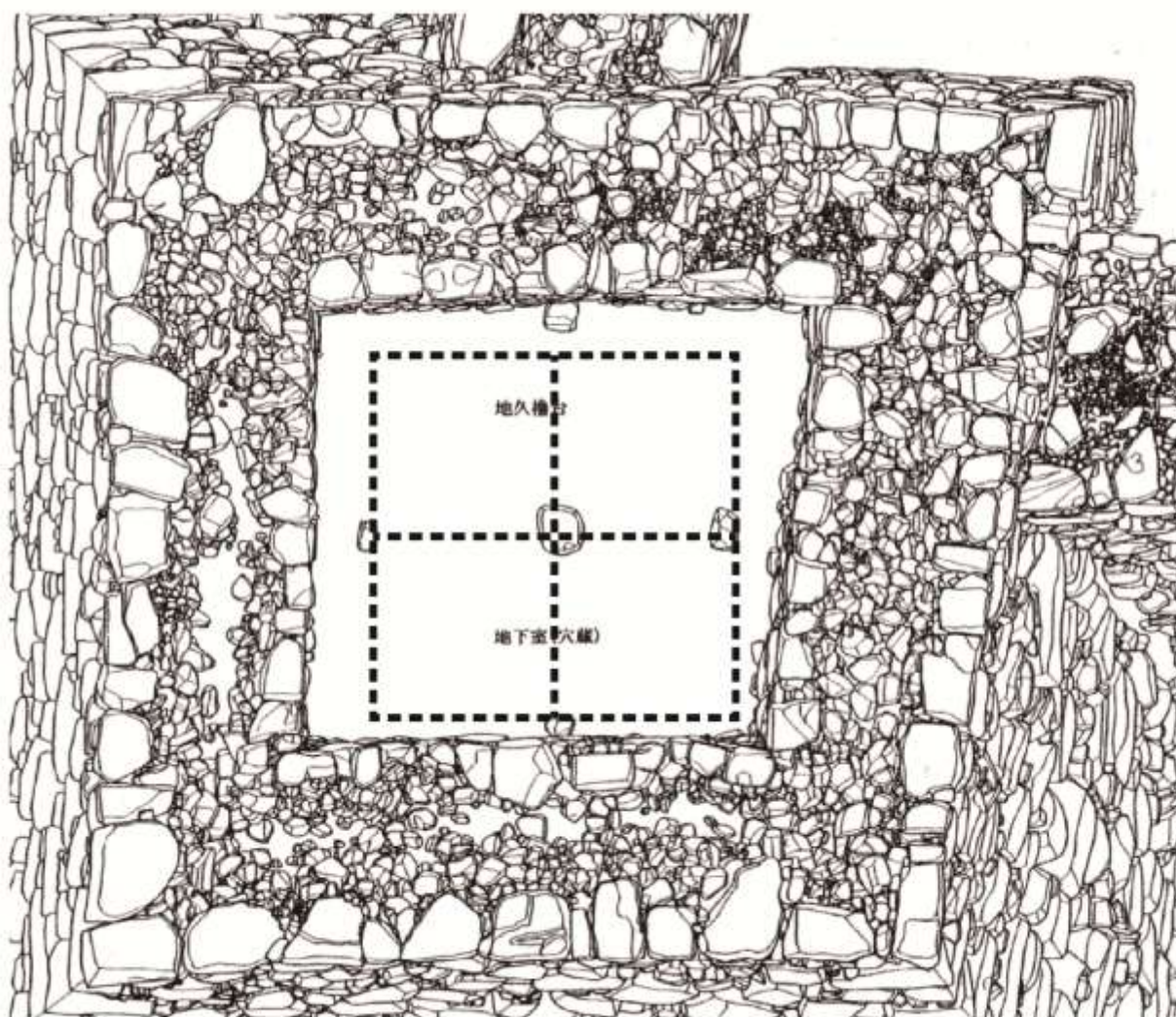
次に、地久櫓周辺の本丸の形状を見てみたいと思います。平面台形を呈する原因は、地久櫓台東辺の石垣が北東方向へ傾斜しているためですが、この北東辺の傾斜は本丸の西辺とほぼ平行していることが分かります。一方、北・西・南辺は、本丸南辺とほぼ平行・直交していることが分かります。このことから、地久櫓台の平面形は本丸の西・南設計ラインを組み合わせてできた平面形である可能性も考えられます。この時重要なのは、穴蔵の平面形が地久櫓台の平面形とほぼ相似形を採ることです。この穴蔵の形成が、地久櫓台の構築と時間差が無い場合、歪んだ平面形が本来の形状である可能性が高いと考えられます。遺物での検証ができなかったため、両論併記としておきますが、(4)で検討する礎石の設計基準寸法から、天守台地下1階と同一基準であるとする考えが妥当であれば、地久櫓台の平面形については後者の説のほうが妥当性が高いと考えられます。



地久櫓台の平面形と基準になる本丸内の平面ライン

(4) 穴蔵内部の構造について

穴蔵内部では5つの礎石が十字に配置されていました。礎石はほぼ等間隔に並んでいますが、東西に比べてやや南北が長くなっています。天守台の地下1階では「田」字状の礎石が確認されていますが、その際的设计規格が1間=6尺5寸となっていることが明らかにされています。下図は天守台と同じ規格を試験的に当てたものです。南北方向はややずれますが、東西方向は概ね合致します。東西方向の寸法の合致を積極的に評価すれば、天守台の地下1階と同一の基準で施工された可能性が考えられます。礎石が上部の構造物の支持においてどのような役割を果たしていたかは今後の課題です。



※縮尺=1/80 1区画は1間四方(6尺5寸≒197cmで換算)

地久櫓台穴蔵の礎石の配置と推定基準寸法 (縮尺=1/80)